

乳幼児コミュニケーション発達尺度の臨床的検討

— 自閉症児と健常児の特徴について —

佐竹 真次*・小林 重雄**

Application of Developmental Scale for Infantile Communication :

Characteristics of autistic and Normal Children

Shinji SATAKE*, Shigeo KOBAYASHI**

Abstract : The communicative behaviors of three autistic children and of two normal infants were evaluated in terms of the developmental scale of infantile communication and the behavior observation. The results suggested that in both methods the normal infants who were at the stage of early language development showed interactive acts which led both to environmental (physical) effects and social effects. On the contrary, the children with severely autistic symptoms showed few interactive acts which led to social effects, yet they showed interactive acts which led to environmental effects. From the result, the consistency between the developmental scale of infantile communication and the behavior observation, and the effectiveness of the developmental scale of infantile communication were suggested. For children with autism who were able to use language to a certain degree, however, necessity to evaluate sophistication of communicative functions and acquisition of conversational rules was suggested.

Key words : autistic child, pragmatics, communicative functions, developmental scale, behavior observation

はじめに

自閉症児の言語発達における障害は、音韻論的・構文論的能力に比べ、意味論的・語用論的能力において特に重篤であると考えられている (Tager-Flusberg, 1981¹⁾)。近年の精神遅滞児や自閉症児に対する言語訓練の方法についても、より自然な場面を設定し対人的な相互交渉を通した語用論的アプローチの重要性が指摘され、また実践されつつある (長崎, 1989²⁾; 園山・秋元・伊藤, 1989³⁾;

佐竹・小林, 1989⁴⁾)。

一方、乳幼児の前言語および初期言語発達段階における語用論的伝達機能の発達を検討するためには、これまで Austin (1962⁵⁾) や Searle (1969⁷⁾) に端を発する発話行為理論を Bates, Camaioni, and Volterra (1975⁸⁾) や Dore (1975⁹⁾) が言語発達研究において発展させた枠組みが用いられてきた。その後、自閉症児の語用論的伝達機能を分析したり、その発達を検討するためにも同様の枠組みが用いられるようになった (Wetherby and Prutting, 1984¹⁰⁾; 黒田, 1987¹¹⁾; 佐竹・木原・小林, 1987¹²⁾; 小林・佐竹・進藤・前川・三浦, 1988¹³⁾)。

Wetherby and Prutting (1984¹⁰⁾)、佐竹・木原・小林 (1987¹²⁾) の研究から、自閉症児の伝達行動は、前言語および初期言語発達段階においては、環境

* 山形県立保健医療短期大学
山形市上柳 260 番地

* Yamagata School of Health Science
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, 990-2212 Japan

** 筑波大学心身障害学系

** Institute of Special Education, University of Tsukuba

的结果事象を導く相互作用的行為（以下、充足的伝達機能または充足的伝達行為と呼ぶ）の割合が健常児よりも多いが、社会的結果事象を導く相互作用的行為（以下、社会的伝達機能または社会的伝達行為と呼ぶ）の割合が健常児よりも少ない、という特徴を持つことが明らかにされた。さらに、佐竹・小林（1989⁴⁾の研究から、自閉症児に対してやりとり行動を積極的に形成することによって、コメント（相互作用的名）や友好表示を中心とする社会的伝達機能を増加させうることが示唆された。

また、佐竹（1994⁴⁾の研究は、症状の重篤な自閉症児においては、充足的伝達機能は高頻度で出現しているが、社会的伝達機能は出現しにくいという先行研究の知見を支持した。それとともに、ある程度言語を用いることができる自閉症児においては、伝達機能のプロフィールが健常児と変わらなくなり、むしろ主要な課題が伝達機能の洗練や会話規則の獲得に移っていくことも示唆した。

ところで、Wetherby and Prutting（1984¹⁰⁾や佐竹（1994⁴⁾の方法は、自閉症児の伝達機能を評価するための枠組みとして有効であるとされるが、その手続きが親しい大人との相互作用のビデオ分析を含んでおり、実行には相当の時間的コストがかかることから、さらに簡便な評価尺度も開発されることが望ましいと考えられる。

このような目的で、小林・佐竹・進藤・前川・三浦（1988¹³⁾はWetherby and Prutting（1984¹⁰⁾の伝達機能カテゴリーに基づいてコミュニケーション発達尺度を作成した。この尺度は生後4ヵ月から41ヵ月までの健常乳幼児573名の資料をもとに標準化の処理を行ったものである。

この尺度を自閉症児と精神遅滞児に適用した結果、自閉症児においては充足的伝達機能はよく発達するが、社会的伝達機能は著しく遅滞するという特徴が認められるとともに、精神遅滞児と自閉症児との伝達の特徴の区別を行うことができ、それらの子どもたちの鑑別診断の一助にもなりうることが示唆された。

しかしながら、このコミュニケーション発達尺度とビデオによる行動観察の両方を同一の対象児たちに適用し、コミュニケーション発達尺度の精度をさらに詳細に検討する試みはまだなされたことがなかった。このことは本発達尺度の信頼性を

裏づけるために重要なことである。

そこで、本研究では、3名の自閉症児と2名の健常乳幼児について、コミュニケーション発達尺度と行動観察による2種類の伝達機能プロフィールを示し、自閉症児の伝達機能の特徴を描出する上での各方法間の整合性について検討することを目的とする。

方 法

1. 被験児

自閉症児A児（女）：生活年齢4歳1ヵ月、発達年齢1歳5ヵ月（津守式乳幼児発達診断検査による）。いかなる指示的動作・発声・発語もみられず、数種の発声が不規則、散発的に観察されるのみであった。言語指示に従うことがほとんどなく、自分勝手に動き回ることが多かった。視線も合いにくく、着席もほとんど持続しなかった。要求はハンドリングによって行い、発声は伴わなかった。

自閉症児B児（男）：生活年齢5歳11ヵ月。5歳6ヵ月時に自発的に描いた人物をDAM人物画知能検査によって評定した。MA3歳6ヵ月、IQ62であった。この時期に、絵画語彙発達検査と大脇式知能検査の実施を試みたが、指示を理解できず、着席もほとんど持続しなかったために、これらの実施は不可能であった。50語以上の語彙を持ち、時に二語文の発話が可能であった。訓練当初は落ち着きがなく、場面にそぐわない発話（特に遅延エコーリア）が多くみられた。要求語は場面に対応していることが多かった。紙とペンを持つと、特定の図形を強迫的に描き続けた。言語指示に従うことがほとんどなく、自分勝手に動き回ることが多かった。視線も合いにくく、机上での学習課題に対する注視も困難であった。

自閉症児C児（男）：生活年齢7歳8ヵ月。資料収集後の8歳9ヵ月の時点で田研・田中ビネー式知能検査を実施した。MA3歳11ヵ月、IQは44であった。また同時期に絵画語彙発達検査を実施した。VA4歳5ヵ月、VQは50であった。多くの語彙を持ち、要求的発話は二語文で表出することもあった。こだわりのあることば、車や食物に関する名称などを大人に伝えようとして発語することもみられた。確認的なニュアンスで質問することもみられた（「ばっちい?」、「壊しちゃだめ?」など）。課題学習場面では、5～10分程度は着席し

Table 1 乳幼児コミュニケーション発達尺度

氏名	男・女	生年月日: 昭和 年 月 日	記入日: 昭和 年 月 日
		年 令: 歳 ヵ月	
診断所見:			
物の要求			
1. 欲求(空腹、ねむい時)によって異なった泣き方をする。	はい・いいえ		
2. 手の届かないおもちゃに向かって手を伸ばしつづける。	はい・いいえ		
3. 要求があるとき(何かを取ってほしい時など)、声を出して大人の注意を引く。	はい・いいえ		
4. 「マンマ」といって食事の催促をする。	はい・いいえ		
5. 指さしや身振りを伴い、声を出し、ほしいものを手に入れようとする。	はい・いいえ		
6. 自分の要求するもの、ほしいものがはっきりしてきて、目的のものを指さす。	はい・いいえ		
7. ただ物の名前を言うだけでなく、二語文以上で要求する。	はい・いいえ		
8. 自分が使いたい物を他の人が使っているとき、「かして」と言う。	はい・いいえ		
行為の要求			
1. よく抱いてくれる人を見ると、自分の身体をのりだして、抱いてもらいたがる。	はい・いいえ		
2. 大人のところに本を持ってきて、しきりに読めとせがむ。	はい・いいえ		
3. おしっこをした後で「チー」と言って知らせる。	はい・いいえ		
4. おしっこ前にだいたい教える。	はい・いいえ		
5. 大人に鉛筆をにぎらせて、「ワンワン」、「ブーブー」等を描けとせがむ。	はい・いいえ		
6. 他の子に「～しようか」といって誘いをかける。	はい・いいえ		
抗議			
1. 遊んでいるおもちゃを取り上げられると反抗したり、泣いたり、怒ったりする。	はい・いいえ		
2. 大好きな遊びを、途中でやめさせられると泣く。	はい・いいえ		
3. 水などをひとりで飲むといっけがきかない。手伝うと怒る。	はい・いいえ		
4. 他の子供が母親の膝に上がると、怒って押しのけたりする。	はい・いいえ		
5. 否定の「ちがう」を使う。	はい・いいえ		

友好表示

1. 声のやりとりを楽しむ(子供の声に応じて話しかけるとまた返してくる)。
2. 人の顔を見て声を出し「オクーン、オクーン」などと話す。
3. いろいろな声を出して人を呼ぶ。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

4. 話しかけるような調子で、わけのわからない言葉を使い、しゃべりかける。
5. 母親に向かって「ママ」と呼びかけるなど、人に呼びかける。
6. 大人に向かっておもちゃを投げたり、イナイナイパー等の遊びを自分で始めて大人を誘う。
7. 「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などを適切に用いる。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

コメント

1. よく知っている場所にくると、指さしたり、声を出したりして教える(自分の家の前、お菓子の戸棚の前などで)。
2. 積木を積み上げたときとか、何かおもしろいものを見つけたときなど、大人の方を見て大声を出して知らせたりする。
3. 「きれいな」「おいしいね」などという表現ができる。
4. 見聞かしたことを母親や先生に話す。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

情報の要求

1. 何かの事物を指さして声を出したりして、問いかけるように大人の方をみる。
2. いちいち「なあに」と聞く。
3. 疑問詞(「どうして」「どうする」「どれ」など)を使える。
4. 聞いていた話しが途切れそうになると「そうしてどうしたの」と催促する。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

応答

1. 大声や突然の物音にびつくりする。
2. 人の声がするとそちらを向く。
3. あやす顔を見て笑う。
4. 自分の名前を呼ばれると、そちらを見る。
5. 話しかけられるのを喜ぶようになり、ニコニコして聞いている。
6. 話しかけたり、歌ったりしてあげると声を出す。
7. 母親が手を差し出すと、喜んで自ら身体をのりだす。
8. 大人が手を差し出して、「ちょうだい」と言うときくれる。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

9. ことばで促すだけで動作をする(「バイバイは」「イナイナイパーは」などに対して)。
10. 「ブーブーどこ」「ボールどこ」「ババどこ」などと聞くとそちらの方を探して見たり、指さしたりする。
11. 「だめ」と言うとき手を引く。
12. 簡単な言いつけ(「新聞を持ってきて」など)に従う。
13. 自分の名前を母親等の親しい人に呼ばれると「ハイ」と返事する。
14. 額むと片づけと一緒に手伝う。
15. 「おいで、おいで」と言うとき近寄ってくる。
16. 「～は誰のもの」と聞くと答える。
17. 幼稚園などで、自分の名前を呼ばれると返事をする。
18. 無関係なふたつの指示(「お茶わんを置いてからパパを呼んできて」など)に従う。
19. 絵を見せて「これ何しているの?」と聞くと、「～してんの」と答える。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

模倣

1. バイバイをやってみせるとまねてやる(アバアバ、イナイナイパー、ニギニギなどでもよい)。
2. 大人のやることをやりたがる(字を書く、くしを使うなど)。
3. 顔の表情を不正確でもまねする(舌を出す、口をパクパクする、口をすぼめるなど)。
4. 父、母のしぐさのまねをする。
5. まわりの子供のすることをまねて一緒にする。
6. 大人の出す音(せき、舌うちなど)や身近に聞こえてくる音(サイレン、ドアの閉まる音など)をすぐあとにまねて繰り返す。
7. はっきりした発音は使わないが、親の顔を見ながらはなしことばの調子をまねる。
8. 大人の言った単語をそのまままねて繰り返す。
9. テレビを見て、歌手などのまねをする。
10. よく知っている二語文、三語文をまねする(「ババ・バイバイ」、「ボール・ナイナイ」など)。
11. 身近な大人とままごとのまねをする。
12. テレビの主人公や動物のまねをして遊ぶ。

はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ
はい・いいえ

ていられた。御用学習などでの訓練者の簡単な指示や質問をほぼ理解し、適切な行動や応答をすることもみられた。

以上の子どもたちは、T大学知能障害学研究室にことばの遅れと対人関係の不成立を主訴として来談し、DSM III-R (1987¹⁵⁾) および小林 (1980¹⁶⁾) の教育的診断基準によって自閉症と診断された。

健常幼児(以下、健常児とする)D児(男), E児(女)。生活年齢は両名ともに1歳6ヵ月。保健所の1歳児健診では、両名ともに正常発達を経ていると診断されており、一語文が出現し始めている。

これらの被験児の言語発達段階は前言語段階～二語文発話段階であり、Wetherby and Prutting (1984¹⁰⁾) の被験児の言語発達段階にほぼ対応している。

2. 手続き

(1) コミュニケーション発達尺度については、質問紙 (Table 1) を用いて対象児の母親と臨床担当スタッフの話し合いのもとに各項目の回答欄の該当する箇所丸印をつけてもらった。次に、プロフィール表を用いて各児の伝達機能プロフィールを表示した。

(2) 行動観察については、被験児と母親の一対一

の自由遊び場面を、正味20分間ずつビデオテープに録画した。

プレイルームの中に絵本、紙とペン、玩具の電車、ぬいぐるみ人形、玩具のきゅうす、茶わん、パズル、ボール、積み木、はさみ、箱車、お絵か

Table 2 行動観察のための伝達機能のカテゴリーとその定義

カテゴリー	定義
相互作用的: 子どもが大人に話しかけて反応を待つ	
充足的	1. 物の要求 手に入れたい物を他者に要求するための動作・発声・発話 2. 行為の要求 ある行為(援助など)の実行を他者に命令するための動作・発声・発話 3. 抗議・拒否 他者の誘いかけを拒否したり、提示された物を拒絶したりするための動作・発声・発話
社会的	4. 友好表示 他者の注意を自分に向けさせるための動作・発声・発話(あいさつや呼びかけなどを含む) 5. 差し出し・見せびらかし 他者の注意を自分に向けさせるための、物を他者に差し出したり見せたりすることを含む動作・発声・発話 ^{a)}
会的	6. 社会的ルーチンの要求 ゲーム的なやりとりを開始・継続することを他者に命令するための動作・発声・発話
的	7. コメント・相互作用的命名 他者の注意を事物に向けさせたり、情報を他者に伝えたりするための動作・発声・発話 ^{b)} 8. 情報の要求 事物についての情報を他者に求めるための動作・発声・発話(質問などを含む) 9. 許可の要求 ある活動を行うために他者の許可を求めるための動作・発声・発話
非相互作用的: 子どもが大人に話しかけず、反応を待たない	
10. 自己制御	自分自身の運動的活動を言語的に示すための発話(活動の直前またはそれと同時に起こる)
11. 命名	事物を同定し、それに自分の注意を集中させるための動作・発声・発話 ^{c)}
12. 活動に伴う発声	物を用いて運動的活動を行う際に産出される習慣化・儀式化された発声
13. 感嘆	事象や場面に対する感情的反応を表出する動作・発声・発話(驚き、喜びなどを含む)
14. 反射的発声	物や人が発する音声に対して反射的に産出する発声
15. 無焦点	子どもがいかなる物や人にも注意を集中していないにもかかわらず産出される発声・発話

^{a)} Wetherby and Prutting(1984)では、「見せびらかし」を中心としているが、本研究では、「見せびらかし」よりも「差し出し」や「渡し」が主として観察されたので、それらを中心とする。

^{b)} 「コメント」の典型的な反応型は、物を指さし(さわっ)て発話(命名)し、大人の顔を見るという型である。

^{c)} 「命名」の典型的な反応型は、大人に一切かまわず、物を指さし(さわっ)て命名するだけという型である。

きボード、トランポリンなどを置いた。

母親には、被験児をボールのやりとりや絵本などに、極めて軽く誘導したりするとき以外は、原則として被験児のほとんどの行動に対して、笑顔やうなずきなどで肯定的に応じるだけにするように、と指示した。

伝達行動の分析は、Wetherby and Prutting(1984¹⁰⁾の手続きによった。すなわち、1つの伝達行為は、子どもが大人や物との相互作用を開始したときに始まり、子どもの注意の焦点が移行し、あるいは順番が交替したときに終了する、音声言語的、発声的、ジェスチャー的行動であるとした。各伝達行為を文脈的情報に照らし合わせて、Table 2に示すWetherby and Prutting(1984¹⁰⁾の15の伝達機能カテゴリーにもとづいて分類した。

結 果

Fig.1にコミュニケーション発達尺度による健常児の伝達機能のプロフィールを、Fig.2に同様にコミュニケーション発達尺度による自閉症児の伝達機能のプロフィールを示した。Fig.3には行動観察による健常児の伝達機能のプロフィールを、Fig.4に同様に行動観察による自閉症児の伝達機能

能のプロフィールを示した。

コミュニケーション発達尺度において、健常児D児、E児では、3種の充足的伝達機能(物の要求、行為の要求、抗議)および3種の社会的伝達機能(友好表示、コメント〈相互作用的な命名・叙述〉、情報の要求)が出ており、プロフィールのラインがほぼ水平に近くなっている。

行動観察においては、健常児D児が表出した伝達行為の頻度は69であった。D児は、行為の要求、情報の要求、抗議、友好表示、差し出し、コメント、非相互作用的な命名、活動に伴う発声、反射的発声、無焦点的発声の伝達機能を示した。彼女の示した伝達行為のうち、相互作用的行為は88.4%であり、非相互作用的行為は11.6%であった。相互作用的行為のうち、充足的伝達行為は29.0%、社会的伝達行為は59.4%であった。

同様に行動観察において、健常児E児が表出した伝達行為の頻度は115であった。E児は、物の要求、行為の要求、抗議、友好表示、差し出し、コメント、非相互作用的な命名、活動に伴う発声、感嘆、反射的発声、無焦点的発声の伝達機能を示した。彼の示した伝達行為のうち、相互作用的行為は39.1%であり、非相互作用的行為は60.9%で

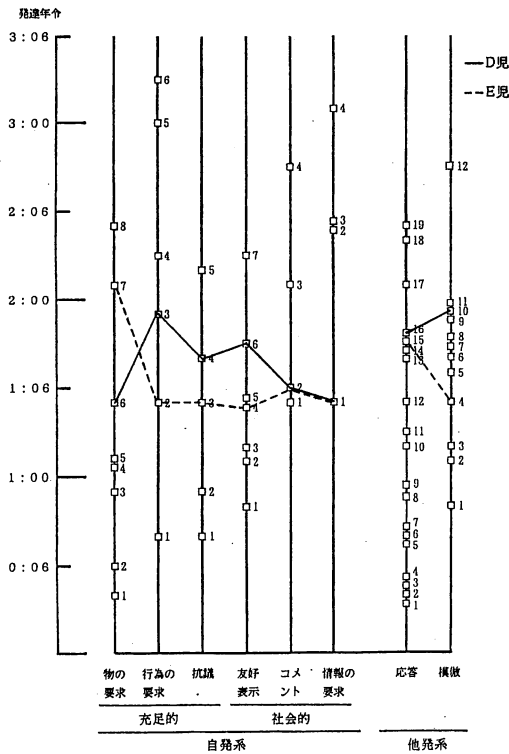


Fig.1 コミュニケーション発達尺度による健常幼児の伝達機能のプロフィール

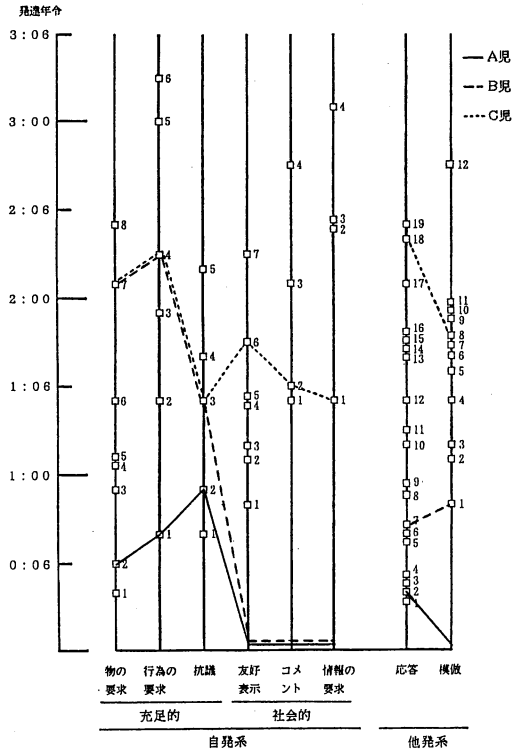


Fig.2 コミュニケーション発達尺度による自閉症児の伝達機能のプロフィール

あった。相互作用的行為のうち、充足的伝達行為は19.1%、社会的伝達行為は20.0%であった。

一方、自閉症児のコミュニケーション発達尺度における伝達機能のプロフィールをみると、A児では伝達機能が充足的機能(物の要求、行為の要求、抗議)のみに限られている。

行動観察においては、A児が表出した伝達行為の頻度は208であった。A児は、物の要求、行為の要求、抗議、友好表示、活動に伴う発声、感嘆、反射的発声、無焦点的発声の伝達機能を示した。彼女の示した伝達行為のうち、相互作用的行為は13.9%であり、非相互作用的行為は86.1%であっ

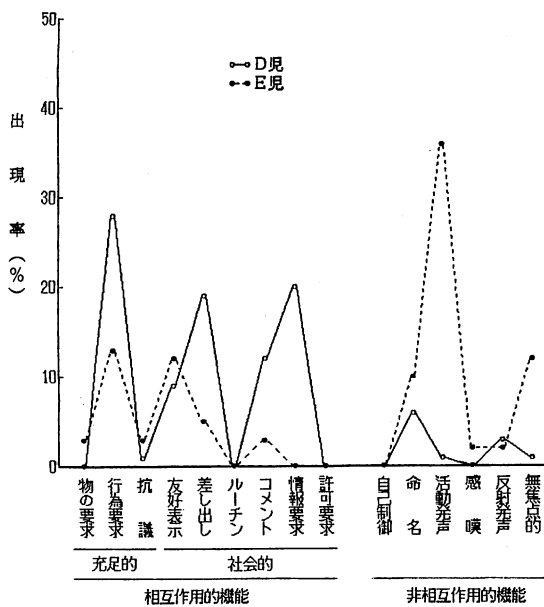


Fig.3 行動観察による健常幼児の伝達機能のプロフィール

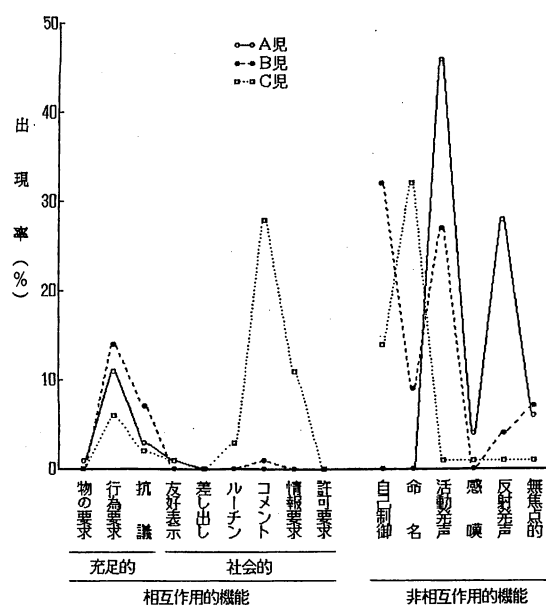


Fig.4 行動観察による自閉症児の伝達機能のプロフィール

た。相互作用的行為のうち、充足的伝達行為は13.4%, 社会的伝達行為は0.5%であった。

自閉症児B児でも、コミュニケーション発達尺度における伝達機能は充足的機能のみに限られている。

行動観察においては、B児が表出した伝達行為の頻度は122であった。B児は、行為の要求、抗議、コメント、自己制御、非相互作用的な命名、活動に伴う発声、反射的発声、無焦点的発声の伝達機能を示した。彼の示した伝達行為のうち、相互作用的行為は21.3%であり、非相互作用的行為は78.7%であった。相互作用的行為のうち、充足的伝達行為は20.5%, 社会的伝達行為は0.8%であった。

コミュニケーション発達尺度において、自閉症児C児では、友好表示もコメントも情報の要求も出現しており、社会的伝達機能がかなり発達している。しかしながら、社会的伝達機能に比べて、物の要求、行為の要求などの充足的伝達機能が比較的高いという傾向はみられる。

行動観察においては、C児が表出した伝達行為の頻度は161であった。C児は、行為の要求、社会的ルーチンの要求、情報の要求、抗議、友好表示、コメント、自己制御、非相互作用的な命名、活動に伴う発声、感嘆、反射的発声、無焦点的発声の伝達機能を示した。彼の示した伝達行為のうち、相互作用的行為は50.9%であり、非相互作用的行為は49.1%であった。相互作用的行為のうち、充足的伝達行為は7.5%, 社会的伝達行為は43.4%であった。

考 察

本研究においては、コミュニケーション発達尺度と行動観察の共通項目である物の要求、行為の要求、抗議(以上、充足的伝達機能)、および友好表示、コメント、情報の要求(以上、社会的伝達機能)を中心に比較検討を行う。

Wetherby and Prutting (1984¹⁰⁾、佐竹・木原・小林(1987¹²⁾の研究では、健常幼児の伝達行動は、前言語および初期言語発達段階においては、充足的伝達行為も社会的伝達行為もともによく発達するとされた。

本研究の健常児D児は、コミュニケーション発達尺度では充足的伝達行為も社会的伝達行為も表

出していた。行動観察の相互作用的行為においても、物の要求、許可の要求は出現していないが、社会的伝達行為6種のうち、友好表示、差し出し、コメント、情報の要求の4種が出現している。よって、充足的伝達機能と社会的伝達機能の両方が発達しているという特徴が、コミュニケーション発達尺度と行動観察の双方において見出された。

健常児E児も、コミュニケーション発達尺度では充足的伝達行為も社会的伝達行為も表出していた。行動観察の相互作用的行為において、情報の要求、許可の要求は出現していないが、社会的伝達行為6種のうち、友好表示、差し出し、コメントの3種は出現している。したがって、充足的伝達機能と社会的伝達機能の両方が発達しているという特徴が、コミュニケーション発達尺度と行動観察の双方において見出された。

一方、Wetherby and Prutting (1984¹⁰⁾、佐竹・木原・小林(1987¹²⁾の研究では、自閉症児は、相互作用的行為においては、物の要求、行為の要求、抗議、すなわち充足的伝達行為を高い割合で示した。また、社会的伝達行為のうち、社会的ルーチンの要求と許可の要求を低い割合で示した。友好表示、差し出し、コメント、情報の要求は出現しなかった。

本研究の自閉症児A児は、コミュニケーション発達尺度では充足的伝達行為のみ表出していた。行動観察の相互作用的行為においては、物の要求、行為の要求、抗議、すなわち充足的伝達行為を多く示した。中でも比較的多く見られた行為の要求は、トランポリンや大玉の上で自身を揺らしてほしいとする要求的な反応であった。抗議は、母親の接近や接触、他の活動への誘導等に対する抵抗や逃避といった反応であった。

社会的伝達行為としては、友好表示を1例のみ表出した。この友好表示は、A児がトランポリン上で横になっているときに、トランポリンの傍らに立っていた母親の方に顔を向けて、「アー」と発声した行為である。母親はそれに答えようとA児に顔を近づけて「なあに」と言った。A児はすぐに顔をそむけてトランポリンから下り、走り去ってしまった。

以上のことから、充足的伝達機能は発達しているが社会的伝達機能はほとんど発達していないという特徴が、コミュニケーション発達尺度と行動

観察の双方において見出された。

自閉症児 B 児も、コミュニケーション発達尺度では充足的伝達行為のみ表出していた。行動観察の相互作用的行為においては、行為の要求、抗議といった充足的伝達行為を多く示した。行為の要求には、彼の好んでいる図形や単語をかくようにと母親に要求する反応が多かった。抗議には、彼が特定の活動に従事しているときに、母親が介入しようとしたり、別の活動に誘導しようとしたりする働きかけに対する拒否や抵抗が多かった。なお、本研究以外の相互作用場面に食物などを配置した場合には、B 児は物の要求を頻繁に示した。

社会的伝達行為として、B 児はコメントを 1 回表出したのみであった。このときに示したコメントは、さまざまな図形を描いては母親に関係なく命名している中で、人の顔らしき図形を描いたのちにそれを指さして「オンジー」と言い、母親の顔を見たものであった。このとき母親は「オンジー？オンジーってなあに？いなかのおじいちゃん？」と聞いた。B 児はそれには答えず、再び図形を描き始めた。

以上のことから、B 児においても、充足的伝達機能は発達しているが、それに比較して社会的伝達機能は発達していないという特徴が、コミュニケーション発達尺度と行動観察の双方において見出された。

自閉症児 C 児は、コミュニケーション発達尺度では充足的伝達行為も社会的伝達行為も表出していた。行動観察の相互作用的行為においては、行為の要求、抗議といった充足的伝達行為とともに、友好表示、社会的ルーチンの要求、コメント、情報の要求といった社会的伝達行為を多く表出した。

行為の要求には、ままごとの道具をカゴに入れるように母親に要求するなどの反応が見られた。抗議には、C 児がままごと道具での活動に従事しているときに、母親が極めて軽く介入しようとしたり、別の活動に誘導しようとしたりする働きかけに対する拒否や抵抗が多かった。

社会的ルーチンの要求には、C 児が母親に「ハッケヨイ」と言いながら相撲を仕掛けていく反応が見られた。情報の要求では、C 児が絵本などを見ながら物の名称や動作語に上昇イントネーションを伴った発話（「ナンバープレートある？」「ワーゲン？」など）を表出し、母親の顔を見るという

反応が見られた。母親はそれに対して、「そうだよ」「ちがうよ」「あるよ」「ないよ」「～だよ」等の応答を行った。しかし、C 児は「なーに？」「どこ？」などの、いわゆる Wh 型の質問はまったく表出しなかった。友好表示には「おかあさん」という母親に向けた反応がたまに見られた。

コメントには、絵本の絵や玩具を指さしながら命名し、母親の顔を見るという反応が非常に多く見られた。しかし、C 児は自動車やままごとに関する事柄の一部にその関心が固定し、一度コメントしたことを何度も繰り返しコメントする傾向がみられた。母親はうなずきや「そうだね」といった承認的・肯定的な対応を行っていた。しかし、母親の意見によれば、伝達の内容があまりにもワンパターンで、かつ、しつこいので、正直なところ飽き飽きしてしまうということであった。

自閉症児 C 児では、充足的伝達機能と社会的伝達機能の両方が発達しているという特徴が、コミュニケーション発達尺度と行動観察の双方において見出された。

C 児のような伝達機能のプロフィールはもはや、Wetherby and Prutting (1984¹⁰⁾、佐竹・木原・小林 (1987¹²⁾) が主張した自閉症児の伝達機能における特徴を示してはおらず、むしろ健常児のそれに近いとさえ言えよう。

Wetherby and Prutting (1984¹⁰⁾) は、自閉症児も社会的認知能力や象徴能力の発達に伴って、その伝達機能が改善されていくことを示唆している。C 児にみられる伝達機能の特徴は、そのような段階に至った自閉症児の状態を示しているように思われる。

しかしながら、母親の質問に対する言語的応答はかなりみられるが、まったく無視するかのようには反応しない場合も多かった。また、C 児には差し出しがまったく見られなかった。自分が手にした物を自発的に母親に渡すことがないばかりでなく、母親が「ちょうだい」と物を要求しても、それに答えて物を母親に渡すこともほとんど見られなかった。母親が彼の手から物を取ろうとすると、彼はそれを手でしっかりとつかみ、身体の向きを変えて拒否した。

このように、自閉症児 C 児の現在における語用論上の問題は、もはや基礎的な伝達機能のレベルを越えたところの、あるいは、それとは別系統の

問題ともいえる。すなわち伝達機能の洗練 (Wh型質問や終助詞の使用など) (佐竹・小林, 1989⁹⁾; 藤原・佐野, 1989¹⁷⁾; 佐竹・小林, 1987¹⁸⁾) や会話規則 (話題の適切で流動的な選択, 相手の発言に対する機敏で適切な応答, 相手に対する供与的行為など) (Prutting and Kirchner, 1987¹⁹⁾) に関する問題であると考えられる。これらの問題もやはり, 伝達機能の問題とともに, 自閉症児のコミュニケーションを特徴づける要因であると思われる。

以上述べてきたように, 初期言語発達段階の健常児では, コミュニケーション発達尺度においても行動観察においても充足的伝達行為と社会的伝達行為の双方がともによく出現していた。一方, 症状の比較的重篤な自閉症児においては, 充足的伝達行為はよく出現していたが, 社会的伝達行為は出現しにくかった。しかし, 認知的, 言語的にある程度発達した自閉症児の中には, 充足的伝達行為とともに社会的伝達行為も発達している者がおり, そのような者にとってはむしろ伝達機能の洗練や会話規則に関する事柄が主要な問題となることも示唆された。

本研究では, 自閉症児の伝達機能の特徴を描出する上でのコミュニケーション発達尺度と行動観察の2種類の方法間の整合性について検討した。自閉症児3名, 健常児2名という限られた数のサンプルによってはいるが, 上に検討してきたように, コミュニケーション発達尺度と行動観察の間には相応の整合性が認められた。したがって, 自閉症児のコミュニケーション発達をアセスメントする際の手段の一つとして, コミュニケーション発達尺度は行動観察と同様に有効であると考えられた。

ただし, C児のようにある程度言語を用いることができるようになった自閉症児のコミュニケーションを評価するためには, 基礎的な伝達機能の評価のみにとどまらず, 会話規則 (会話能力) 等の視点にもとづく評価も必要であり, そのための手段的開発も重要であると思われる。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり, 筑波大学心身障害学系助教授 前川久男先生にご指導ご助言をいただきました。記して謝意を表明いたします。

文 献

- 1) Tager-Flusberg, H. : On the nature of linguistic functioning in early infantile autism. *J. Aut. Devel. Disor.*, 11 (1), 45-56, 1981.
- 2) 長崎 勤: 精神遅滞児の言語指導をめぐる諸問題—目的, 指導システム, 指導方法を中心に—. *特殊教育学研究*, 27 (3), 117-123, 1989.
- 3) 園山繁樹・秋元久美江・伊藤ミサイ: 幼稚園における—自閉性障害児の発話の出現過程と社会的相互作用—. *特殊教育学研究*, 27 (3), 107-115, 1989.
- 4) 佐竹真次・小林重雄: 自閉症児における語用論的伝達機能の発達に関する研究. *特殊教育学研究*, 26 (4), 1-10, 1989.
- 5) 佐竹真次・小林重雄: 自閉症児における情報要求表現の形成. *日本特殊教育学会第27回大会発表論文集*, 476-477, 1989.
- 6) Austin, J. L. : *How to do things with words*. J. O. Urmson (Ed.), Harvard University Press, 1962. 坂本百大 (訳) *言語と行為* 大修館, 1978.
- 7) Searle, J. R. : *Speech acts*. Cambridge University Press, 1969. 坂本百大・土屋俊 (訳) *言語行為* 勁草書房, 1986.
- 8) Bates, E., Camaioni, L., and Volterra, V. : The acquisition of performatives prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly*, 21, 205-226, 1975.
- 9) Dore, J. : Holophrases, speech acts, and language universals. *J. Child Lang.*, 2, 21-40, 1975.
- 10) Wetherby, A., and Prutting, C. : Profiles of communicative and cognitive-social abilities in autistic children. *J. Spee. Hear. Res.*, 27, 364-377, 1984.
- 11) 黒田吉孝: 話し言葉をもたないある自閉症児のコミュニケーション活動の発達と障害の研究—5年間の追跡研究—. *特殊教育学研究*, 25 (2), 61-67, 1987.
- 12) 佐竹真次・木原利憲・小林重雄: 自閉症児における語用論的伝達機能の評価. *日本特殊教育学会第25回大会発表論文集*, 530-531, 1987.
- 13) 小林重雄・佐竹真次・進藤桂子・前川久男・三浦剛: 言語発達遅滞児の伝達行動の変化—乳幼児コミュニケーション発達検査をとおして—. *昭和62年度厚生省心身障害研究「障害幼児を中心とした治療教育法の開発と統合化に関する研*

- 究」報告書, 93-102, 1988.
- 14) 佐竹真次: 自閉症児における語用論的伝達機能の評価に関する問題. 東京学芸大学附属学校研究紀要, 21, 202-210, 1994.
- 15) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 3rd ed. Revised (DSM III-R). APA, Washington, DC., 1987.
- 16) 小林重雄: 自閉症—その治療教育システム—. 岩崎学術出版社, 1980.
- 17) 藤原義博・佐野とも子: 自閉症児の応答誘発表現の形成. 日本特殊教育学会第27回大会発表論文集, 432-435, 1989.
- 18) 佐竹真次・小林重雄: 自閉症児における語用論的伝達機能の研究—終助詞文表現の訓練について—. 特殊教育学研究, 25(3), 19-30, 1987.
- 19) Prutting, C. A., and Kirchner, D. M.: A clinical appraisal of the pragmatic aspect of language. J. Spec. Hear. Disor., 52, 105-119, 1987.
- 1997. 12. 30. 受稿, 1998. 2. 9. 受理—

要 約

3名の自閉症児と2名の健常乳幼児の伝達機能を, コミュニケーション発達尺度と行動観察の2種類の方法で評価した。その結果, どちらの方法においても, 初期言語発達段階の健常児では, 環境的(物理的)結果事象を導く相互作用的行為と社会的結果事象を導く相互作用的行為の双方がともに出現していることが認められた。一方, 症状の重篤な自閉症児においては, 環境的結果事象を導く相互作用的行為は高頻度で出現していたが, 社会的結果事象を導く相互作用的行為は出現しにくかった。以上の結果から, コミュニケーション発達尺度と行動観察の間には相応の整合性が認められ, コミュニケーション発達尺度の有効性が示唆された。しかし, ある程度言語を用いることができる自閉症児においては, 伝達機能の洗練や会話規則の獲得を評価する必要性のあることも示唆された。

キーワード: 自閉症児, 語用論, 伝達機能, 発達尺度, 行動観察